

「心をひとつにして、福音の信仰のために」 ～新型コロナウイルス時代を生きる教会～

2020年5月 日本福音同盟（JEA）神学委員会

目次

- | | |
|--------------------------------------|-------|
| 1. 「我、教会を信ず」 | 篠原基章 |
| 2. 「いっしょに」集まる幸い
～愛と善行を励まし合うことにこそ～ | 赤坂 泉 |
| 3. 聖書（特に旧約聖書）における律法の柔軟な運用 | 千代崎備道 |
| 4. インターネットを用いて「礼拝する」とは | 山田 泉 |
| 5. 遠隔礼拝における聖餐 | 青木義紀 |
| 6. 感染症とキリスト教会の歴史から | 吉川直美 |
| 7. AI技術の成熟と教会を考える～30年後を見据えて | 能城一郎 |
| 8. コロナ禍におけるみことばの励まし | 宮崎聖輝 |

新型コロナウイルス感染拡大により日本ばかりでなく、世界中の教会がパンデミックの大きな影響の下に置かれています。特に4月6日緊急事態宣言が出された後、私たちは、これまで毎週ささげていた教会での礼拝の休止を余儀なくされ、さまざまな集会や活動が制限されてきました。JEA加盟の教団でもさまざまな対応がとられ、地域教会に判断を委ねながらも、教団としての対応を行っています。通常の礼拝に代わってオンラインで礼拝配信や説教の配信をはじめ、ZOOM、Youtube、Facebookなどを使った新しい形の礼拝も一気に広がりました。

その後5月25日に緊急事態宣言は解除されましたが、感染の第二波、第三波を防ぐために「新しい日常」が始まりました。今後、教会もこの「新しい日常」の中でその働きを進めていくこととなります。このような大きな変化の中にある私たちは、現実的にさまざまな問いに直面しています。それらの問いは、私たちの信仰に本質的な課題を突き付けています。たとえば、教会に兄弟姉妹が集うことの意味とは何か、そもそも礼拝とは何か、キリスト者の交わりとは何か、オンライン上の礼拝はこれからも続けるべきなのか、聖餐式はオンラインで可能なのか、これまでの教会は疫病にどのように取り組んだのか、これからの教会は5GをはじめとするAI技術をどのように取り入れ、新たな教会の在り方、宣教の可能性に取り組めるか、などです。このような問いに私たちは向き合いながら「新しい日常」の中に置かれています。

日本福音同盟・神学委員会では、理事会の要請を受けて、これらの問いに対する神学的な考察を行いました。それぞれの先生方が神学校での教鞭をとり、地域教会の牧会に携わる忙しいスケジュールの中、一か月という短い期間でペーパーを書き上げてくださいました。しかもできるだけ読みやすく、信徒の方々にも考えていただきたいという願いから、A4で一頁という制限を設けて取り組んでくださいました。

これらの神学エッセーは、私たちに投げかけられている問いに対して、何か聖書的、神学的回答を導き出すものではありません。神学委員のそれぞれの先生方が、現場の地域教会と神学校で奉仕をしながら、同労の先生方とともに苦しみ、悩みながら、いま考えておられることをまとめてくださったものです。それは、これらの課題についてこの文章を読む方々と一緒に考えるため、このような時代に置かれている私たちが、互いに励まし合い、心をつなげて、福音の信仰のために、力を合わせて戦いたいという願いから書かれています。そのような神学委員の思いを汲みながら、お読みいただけると幸いです。

日本福音同盟・総主事 岩上敬人

「我、教会を信ず」

福音伝道教団/東京基督教大学准教授 篠原基章

「百年に一度の危機」とされる新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の世界的な拡大は、私たちの日常を大きく変える程の影響を及ぼしています。教会も少なからず変化を余儀なくされています。多くの教会は教会堂に集まることを一時的に止め、オンライン礼拝に切り替えるなど様々な対応を迫られています。しかしながら、教会堂が閉ざされたとしても、教会は決して閉ざされることはないのです。別言すれば、どのような状況下にあっても、教会が存在することを止めることはないのです。

私たちは教会というと、屋根の上に十字架のついた建物を思いおこすかもしれません。しかし、それは教会堂であって、それ自体が教会ではありません。教会は「キリストのからだ」（エペソ1章23節）であり、教会のかしらであるイエス・キリストにあって集められた群れそのもののことです。それゆえ、教会は私たちが行く場所ではなく、私たち自身が教会そのものであることを思い起こしたいのです。私たちひとりひとりが教会の生きた部分であり、霊の家を構成する「生ける石」であるのです（Iペテロ2章5節）。

感染予防の一環として、「ソーシャル・ディスタンス」（社会的距離の確保）が重要だとされていますが、世界保健機構（WHO）はこれを「フィジカル・ディスタンス」（物理的距離の確保）と言い換えています。「社会的距離」という表現には、人と人のつながりという最も人間らしい社会的側面を断つというニュアンスが含まれてしまうことを危惧してのことです。教会は互いに物理的距離を確保する必要に迫られていますが、これが「スピリチュアル・ディスタンス」を生んではならないでしょう。物理的距離が強調される今だからこそ、私たちがキリストにあって一つのからだとされているという霊的現実を思い起こしたいのです。キリスト者は互いに離れていたとしても、互いを自分の一部として感じ、祈りに覚えることを通し、互いに仕え合うことができるのです。

エペソ書は、教会はキリストのからだであり、「すべてのものをすべてのもので満たす方が満ちておられるところ」（エペソ1章23節）だと教えています。コロナ禍にあって、教会の活動は様々な制限され、自粛を余儀なくされているように見えます。一見、教会の働きは停滞しているように思われます。しかし、教会に与えられている生命はひとりひとりのキリスト者によって、確かに今もなお社会全体に差し出されているのです。私たちの生活の場、働きの場こそが教会の最前線であることを覚えたいと思います。信徒はキリストの祭司性に与っており、それぞれの場において、それぞれの職業に従って、この世の真只中で神に霊的な犠牲を捧げ、そのことによってキリストのからだなる教会を建て上げるのです（Iペテロ2章5節）。教職者は聖徒たちをこの奉仕の働きのために整える召しをこの時も受けています（エペソ書4章12節）。

私たちは公同の教会を信じています。公同とは普遍的であるということです。すなわち、私たちは時間と空間を超えた一つの普遍的な教会を信じています。しかし、それと同時に教会は特定の歴史的且つ文化的な存在です。キリストは私たちの歴史の中に受肉されました。そして、教会もまた歴史の中に受肉するようにと召されています。キリスト教の歴史は特定の時代、特定の文化に生きた教会の歴史だともいえます。今、教会のバトンは私たちの手に託されています。危機は強さと弱さをあらわにします。ポストコロナ時代を見据えつつ、神のことばに固く立ち、変えてはいけぬものと変えてもよいものを見分ける洞察力が与えられるように祈り求めたいと思います。

百年に一度の危機にあっても、教会は教会であることをやめることはありません。それは、教会のかしらなるキリストが世の初めから終わりまで、ご自身の教会を集め、守り、保たれるからです。教会は、聖霊の力によって、この困難な時代にあっても希望に満たされ、信仰によって得られるあらゆる喜びと平和を証し続けるのです。「神のことばとイエスのあかしとのゆえに」（黙示録1章9節）。

「いっしょに」集まる幸い ～愛と善行を励まし合うことにこそ～

聖書宣教会/聖書神学舎 赤坂泉

予想を超える事態に直面して浮き足立ったのは、個人や行政ばかりでなく、教会も、と言えるでしょう。主日礼拝の整え方から教会活動の隅々まで、多くの判断を迫られました。神の民の優先順位と市民的な責任の引き受け方の両立とは、緊急事態宣言と自粛要請の中でなす教会の主体的な選択は、と神を愛し、隣人を愛する具体的なあり方を祈り求める日々が続きます。

ヘブル 10:25 の「ある人々のように、いっしょに集まることをやめたりしないで、かえって励まし合い（新改訳第三版）」という訳文は、教会の議論をあるいは助け、あるいは緊迫させたようです。改めて「いっしょに」集まることの意味を考えましょう。新改訳 2017 は「ある人たちの習慣に倣って自分たちの集まりをやめたりせず、むしろ励まし合ひましょう」と訳しました。細かな議論は措いても、「いっしょに」ではなく「集まり」に注目すべきことは明らかです。「励まし合い」を見落としてはなりません。また少し視野を広げて、19 節からの段落にある三つの勧告に留意しましょう。信仰をもって神に近づこう。希望を告白しよう。そして「愛と善行を促すために、互いに注意を払おうではありませんか(24)」です。25 節の、集まりを止めないで、励まし合うようにという勧めはこの第三の勧告に従属しています。つまり、いっしょに、どのように集まるかがこの箇所を中心的な関心ではありません。神に近づくこと、希望の告白に生きること、とりわけ愛と善行を促し合うことを勧告しており、そのために集まり、励まし合おうというのです。しかも、3:13 に「日々互いに励まし合って」とあったように、主日の礼拝や特定の集会だけのことではなく、日々のことです。

確かに教会は「一つになって」あるいは「同じ場所に」（使徒 1:15, 2:1, 44, 47...）集まりました。しかし、困難や迫害によって散らされると「みことばの福音を伝えながら巡り歩いた」（cf. 使徒 4:29, 31, 6:7, 8:4, 12:24...）のでした。パウロの宣教の足跡からも、一つの場所に集まった教会、家々に集まった教会、少人数の集会など多様なあり方が窺われます。

こうしてみると、どのように集まるかは副次的なことです。形態ではなく、集まる目的に焦点を合わせましょう。この事態にあって、愛と善行を促すために互いに注意を払うこと、そのために集まり、そのように励まし合うことが大切です。

こんにち、私たちには多様な手段が備えられていることを神に感謝します。一堂に会することは幸いです。顔と顔を合わせ、手と手を合わせるなかでいただく励ましがあります。同時に、インターネット等を介して「集まる」ことも幸いです。礼拝や祈祷会への「出席」がむしろ増えているという事例も聞きます。未信の家族が礼拝に連なり、多忙を理由に諦めていた教会員が次々に祈祷会に連なる。このときならではの幸いも数えましょう。集まること自体ではなく、愛と善行を励まし合うこと、神を愛し、隣人を愛する日々の現実を励まし合うことが目的であるなら、それを実現する手段はもっとありそうです。

ヘブル書の「ある人たち」がなぜ集まりを止めるようになったのか確かな情報はありませんが、（例えばローマ帝国による迫害のような）予期せぬ困難に直面して、という説は有力です。キリスト者を、信仰と希望、愛と善行から遠ざけようとする力に屈したのでしょうか。私たちは困難に屈するのではなく「むしろ励まし合ひましょう。」巷間には「自粛警察」のような愚かさばかりでなく、寄付やボランティアのような愛と善行の具体的な兆しも見られます。キリストの民こそ率先して地の塩、世の光として働きたいと思えます。

そして「コロナ後の世界」を展望しましょう。社会生活も経済も、政治も国際情勢も、あらゆる面で激変を見るのでしょうか。直面するのが何であっても、信仰をもって神に近づき、希望を告白し、そして「愛と善行を促すために、互いに注意を払おうではありませんか。」そのために教会の「集まり」がいよいよ用いられますように。

聖書（特に旧約聖書）における律法の柔軟な運用

日本ホーリネス教団/東京聖書学院 千代崎備道

コロナウイルスの感染拡大のために、多くの教会では教会堂に集まって礼拝を捧げることができないでいます。私たちは信仰の先達から「安息日厳守」と教わってきましたし、また集まって礼拝をすることの大切さを講壇から教えてきました。ところが教会堂に集まることを「禁止」せざるをえないことで牧師も悩み、また信徒の中にも教会堂に行けないことで罪意識を感じてしまう人もいるかもしれません。確かに「安息日を聖とせよ」と教えているのは聖書であり、私たちは聖書を正典（信仰と生活の基準）としているのですが、その聖書が時には定められた規定に例外を設けたり、代替案を提示していることも私たちは知ることができます。

過ぎ越しの延期（民数記9：6～11）

過ぎ越しの生け贄を捧げるのは第一月の14日だが、死体に触れて身を汚した人はそれができなかった。その人々は汚れの期間が終わって、第二月の14日に一月遅れの生け贄を捧げて過ぎ越しを守ることが許された。

捧げ物の代替（申命記14：22～26）

収穫の十分の一を「主の御名を置くために選ぶ場所」（後に神殿となる）に必ず携えて行って神の前で家族とするのだが、道のりが遠すぎる場合は金に換えて運び、主の選ぶ場所に行ってからその金で好きなものを買って求めて、それを家族とともに食して喜ぶことが許されている。

安息日の例外（ヨシュア記6：3～4）

エリコ攻略には七日間の行動が命じられた。曜日は明記されていないが、そのうちの一日は安息日であるにも関わらず他の日と同様の行動が命じられた。これはエリコ攻略そのものが神に捧げる宗教的儀式と見なされたためと考えることも出来るが、神自らが命じられた場合は、安息日にも行動することは間違いではない。

祭りの日程の地域による相違（エステル記9：16～229）

ユダヤ人を殺そうとする敵を除いて安息を得たことを記念して、プリムの祭りが制定されたとき、地方とシュシャンの都では戦いに日数が異なるために、祭りの日程にも違いがあった。すなわち地方ではアダルの月の14日が祝宴の日であるが、シュシャンの都では14日と15日の二日間を祝宴の日とした。プリム祭はモーセ律法には無い祭りのため、強い規定ではなかったのかもしれない。

礼拝の場所（聖所）の例外（エゼキエル書11：15～16）

バビロン捕囚となった人々は神殿での礼拝が行えなかったが、彼らが行ったその国々で、神ご自身が聖所となると約束された。これにより捕囚の民は各地に会堂を建てて安息日の礼拝を行い、その礼拝形式がやがてキリスト教の礼拝スタイルの元となっていく。なお、この約束は「しばらくの間」との条件付きで、その期間がエルサレム神殿破壊から神殿再建までのおよそ七十年かは明示されていないとしても、永久的な措置とは言えないだろう。

以上のように、律法の規定は状況によっては例外や柔軟な運用が許されることもありました。それは人間の側のやむを得ない状況を神が配慮しておられることの現れと思われます。このような律法における神の御心があるからこそ、キリストの弟子たちが安息日の規定を破っていると非難するパリサイ人たちに安息日について教え「安息日の主」だと宣言され（マタイ12：1～12）、安息日は人間のために設けられたと宣言をされた（マルコ2：23～28）のです。

安息日（私たちにっては日曜日と考えて）に定められた場所（旧約時代は聖所や神殿、新約時代以降は家の教会や教会堂）で礼拝を捧げることを、パリサイ的に守らなければならないとするなら、私たちが集まっての礼拝を行わないことは問題となります。しかし、このような状況において、もし神が私たちの出来ることを嘉してくださいるのでしたら、新しい方法があり得ると考え、その中で最善を尽くすことは、聖書的に間違いとは言えません。緊急事態の後には教会堂に集まっての礼拝スタイルが再開されることを否定する必要はありませんが、新しいスタイルを柔軟に考えることは宣教の機会を広げるきっかけとなるかも知れないことを感じています。

インターネットを用いて「礼拝する」とは

ウェスレアン・ホーリネス教団/ウェスレアン・ホーリネス神学院 山田 泉

「全地よ、主に向かって喜びの叫びをあげよ。喜び祝い、主に仕え/喜び歌って御前に進み出よ。知れ、主こそ神であると。主はわたしたちを造られた。わたしたちは主のもの、その民/主に養われる羊の群れ。」詩篇100編1～3節（新共同訳）

新型コロナの感染者数が東京で目に見えて増加した3月、その少し前から礼拝出席を控える方が起こり始め、それに伴い、多くの教会でインターネットによる礼拝のライブ配信が始まりました。その後、緊急非常事態宣言の発表がなされてからは、インターネットを用いての礼拝はある意味必然なこととなりました。教会に集まれないという特殊なケースでインターネット配信での礼拝が主となる時、通常と全く同じ形で構わないのか、ということを考えさせられます。多くの場合家庭で、しかもクリスチャンは一人だけという中で周囲への遠慮、これがきっかけで教会に行ったことのない家族と一緒に視聴してくれた場合、すなわち新来会者へのような配慮、いつも教会に出かけて礼拝をささげていた方の、礼拝への心備えに対して、何らかの考慮をしなくていいのかと思いを巡らします。

実際教会は人々が礼拝に心を向けて集中しやすいように、神に出会い深い交わりに入れるようにと、伝統的に牧会的に配慮が尽くされています。たとえば教会での礼拝への導きについて挙げることでしょう。

(1) 礼拝順序

多く教会では週報の「礼拝順序」に従って礼拝が進められます。この順序は教派によって異なりませんが、いずれにあってもその礼拝順序は単に項目の羅列ではなく有機的に構成されています。レイモンド・アバ『礼拝』（日本基督教団出版）によると、「礼拝の基本的構造」として＜交互運動と上昇運動＞には、礼拝の順序には神から人へ、人から神への対話はキャッチボールのように交互運動があり、振子運動の図が描かれます。これに上昇原理が加わり、礼拝の進行と共に引き上げられ、らせん階段の図が描かれる。日曜日礼拝に向かう私たちは、社会での重荷や信仰の弱さの負目をひきずりながらかもしれないが、礼拝に身を置く時、神は私たちが養い、引き上げ、新しい力に満たして遣わして下さる。

(2) 五感を用いて（教会は人の五感に働き、その心を神に向けるように助ける）、たとえば、

視覚：教会の建物、整えられた玄関・受付、礼拝堂の趣、講壇の立派な聖書、生花、典礼色など

聴覚：奏楽のオルガンはその日の礼拝の内容を示し、賛美歌、聖書朗読、メッセージ、祈り、など

触覚：記名帳、週報ボックス、聖書、賛美歌、いつもの椅子、聖餐式のパンと盃、など

味覚：聖餐式のパンとぶどう液、お茶や食事、など

嗅覚：プロテスタントには殆どないですが「お香」がその日の意味を知らせる、教会の空気、など

そして何より愛兄弟との交わり、教会の先生からの声かけや握手など、生きた命の交わりが教会の礼拝にはあります。

インターネット等に託する礼拝は可能性を多く含みつつ、届けられないものも多くあります。試みの一例として

- ・ 時間短縮：賛美を1曲・交読分を省略、メッセージを通常より少し短くする。
- ・ 機材の補充：従来の音響設備では聞きづらい、フリーズするなど、物理的に届かないことがある。
- ・ 情報：聖日前後の資料等の送付
- ・ そして何よりも聖霊の臨在、聖霊の働きを強く祈ること。実際に距離があり、同じ空気を吸うことができない状況で、時空を超えて臨在して下さる聖霊による一致を、今までに増して祈る。

聖霊の働きにより、家庭にて一人で礼拝をするのであっても、「主の祈り」で教えられたように「我ら（わたしたち）」と祈ることを体験し、「昔いまし、今いまし、永遠にいます主をたたえる」礼拝に共にあずからせていただけることを思います。

今後、このような事態ではなくても、それぞれの生活に応じてインターネットによる礼拝が用いられることが考えられます。祈りつつ、模索しつつ進んでまいりたいと願います。

遠隔礼拝における聖餐

日本同盟基督教団/東京基督教大学講師 青木 義紀

はじめに

今般の新型コロナの影響で、多くの教会がインターネット等を利用した遠隔礼拝を行っています。そのような遠隔礼拝の中で、聖餐を行うことの是非が問われています。そもそも聖餐には、キリストにある信仰者の一致が表されていますが、皮肉なことにプロテスタント教会では、その最初期からこの教理をめぐって一致を見出せなかったという残念な歴史があります。今回の課題をめぐっても、おそらく賛否両論様々な意見があり、一致を見ることは難しいだろうと思います。それぞれの立場を尊重しつつ、福音派諸教会と、そこに生きる牧師と信徒の皆さんにとって、改めて聖餐の本質を問う契機となり、それぞれの神学的確信に立って聖餐がふさわしく執り行われることを願うものです。

1. 聖餐において大切なこと

聖餐において大切なことは、①主の御言葉、②主の指定した物質（パンとぶどう液）、③主の意向の三つです。第一に、主の聖餐制定の御言葉がきちんと読まれることです（マタイ 26:26-29, マルコ 14:22-25, ルカ 22:14-20, I コリント 11:23 以下など）。第二に、主が指定された物質であるパンとぶどう液が使われることです。パンでないものや、ぶどうの実で作った液体でないものが使われないということです。第三に、主が聖餐を制定された意向を踏まえてこれが執行され、会衆もまた主の意向を踏まえてこれにあずかることです。要するに、主が語られた通りに、主が指定された物質を使って、主の望まれる聖餐が行われることです。それに先立って、私たちの思いや都合が優先されてはならないのです。

2. 一つの体にあずかること

聖餐において重要なことは、一つのパンと一つの杯から分けられたものに、それぞれがあずかるということです（I コリント 10:16-17）。遠隔礼拝で聖餐が行われる場合、各自がそれぞれにパンとぶどう液を用意するのではなく、教会で分餐したものを届けてもらう方が良いでしょう。もしそれが困難であれば、メーカーや商品を指定して、せめて同じ味のパンとぶどう液にあずかるようにしたら良いのではないかと考えています。

3. 聖別の課題

聖書には、イエスが「パンを取って」から神をほめたたえてこれを裂いたと書かれています（マタイ 26:26）。「杯を取って」から感謝の祈りをささげたと書かれています（マタイ 26:27）。聖別において重要なことは、聖別の対象を明確にすることです。その点で、遠隔礼拝における聖餐では、この点が曖昧になる可能性があるので注意が必要です。信徒が、聖別されていないパンとぶどう液にあずかることがないように、執行者は十分に気を付けなければなりません。

4. 「ふさわしい者」の吟味

聖餐において重要なことは、聖餐にあずかるべき者があずかり、そうでない者があずかることのないようにすることです。これは、主のさばきを身に招くことのないよう、会衆を守るためにも重要なことです。このために司式者は、相当の神経を使います。しかし遠隔礼拝における聖餐では、この点で執行者から会衆が十分に見えないという難しさがあります。かなりの部分を会衆にゆだねることになります。会衆の主観に任せるだけでなく、より客観的な吟味のために、この点をどう克服し、聖餐をふさわしく執行するかは、今後の大きな課題だと思います。

むすびにかえて

私自身は、しばらくの緊急事態の期間は、聖餐を控える方が賢明だと考えています。教会も個人も、通常の生活が確保できない非常事態の中で、不用意に聖餐を行って、思わぬ失敗を犯したり、主の御心を損なったりすることを何より危惧するからです。しかしこれが長期化し、一年も聖餐にあずかれないという事態が生じることは避けるべきだと思っています。むしろ、御言葉の約束をますます確信させる聖餐が、ふさわしく行なわれることによって信仰者が希望を見出し、福音の約束に立ってこの困難を乗り越えていくことを何よりも願うものです。

感染症とキリスト教会の歴史から

シオンの群教会/聖契神学校 吉川直美

キリスト教会は、その始まりから「ローマ帝国が不治の疫病によって荒廃されなかったなら、キリスト教が世界勢力としての基礎を固めることにたぶん成功しなかったであろう。」(F・F. カートライト『歴史を変えた病』倉俣トーマス旭/小林武夫訳、法政大学出版会)と評されるほど、感染症と深い関わりを持ってきました。その一部を概観して、今を生きる私たちへのメッセージを聴き取りたいと思います。

■キュプリアヌスの疫病

ローマ帝国は2世紀から6世紀にかけて、度重なる疫病に舐め尽くされてきました。とくに3世紀にローマを打った「キュプリアヌスの疫病」において、既存の諸制度が為す術もなく、隔離の名の下に感染者を遺棄して信用を失墜する一方、キリスト教会は、見捨てられた病者を主イエスに倣って看護し、貧しい者や異教徒の遺体も分け隔てなく埋葬することで、死亡率を押し下げて異教徒の信頼を得ていきます。彼らの心を捉えたのは、献身的な看護や兄弟愛のみならず、その源にあるキリスト教の死生観、終末観でした。神は正しく生きた者に永遠のいのちを与えるという教えは、死と隣り合わせの人生を意義あるものとし、貧しい者にも生きる希望を与えたのです。看護のためにいのちを落とした者は殉教者として榮譽を受け、福祉や医療行為は教会の働きとして発展していきます。こうして、福音の証しとともに教会の社会における役割が方向付けられていったのでした。

■鞭打ち苦行者とユダヤ人迫害

中世ヨーロッパを苦しめたペストは、大別すると三つの反応を引き起こしました。第一に、ボッカチオの『デカメロン』に見られるような刹那的・享乐的な生活態度です。第二に、疫病を神からの罰と受けとめて、その怒りを回避しようとする贖罪行為としての「鞭打ち苦行運動」が挙げられます。自分自身で、あるいは互いに鞭で打ち叩いて行進するという異様な光景でしたが、当初は集団懺悔として教会にも歓迎され、聖職者と信徒の区別なくヨーロッパ全体で何千何万人が熱狂しました。やがて、富裕層や形骸化した教会に対する革命の様相を帯びるに至って、教会の激しい弾圧に遭い自壊の道を辿りますが、彼らの熱は中世の終焉を推し進め、宗教改革への布石となりました。第三に、鞭打ち苦行者たちの贖罪行為は、神の怒りを宥めるための犯人探しに転じ、ユダヤ人、障がい者、富裕層などが標的とされました。関東大震災において朝鮮人に着せられた濡れ衣と同じく、ユダヤ人が井戸に毒を投じたという噂がまことしやかに流れ、強制改宗させられた末に焼き払われています。彼らは東へと逃げますが迫害の連鎖は止むことなく、ホロコーストへのレールが敷かれていったのです。

一方、私たちと同様に外出自粛を余儀なくされた人々が、「強制された安息日」として肯定的な意味づけをしていたという記録に励まされます。前述のような狂騒の中で、神との関係を深めた人たちもいたのです。

■COVID-19下の教会

このように、感染症と教会の歴史には光と影があります。3世紀のクリスチャンがいのちを賭して証しした福音、主イエスの十字架の愛と復活の希望は、今に至るまで消えることなく貫かれている光です。被災地で「キリストさん」と信頼され慕われる姿に、終油を塗るために感染しいのちを落とした司祭たちの中に、葬儀で語られる復活の希望のことばに、福音の光は引き継がれています。

一方、人には恐れや不安から原因探しをして、異民族や弱い者、異なる価値観を持つ者に罪を着せようとする、そのような闇があることも心しておかなければなりません。ますます強者の論理が幅をきかせる世界で、教会は神の国の民として、COVID-19下ゆえに与えられた福音宣教の可能性を励まし合っていこうではありませんか。

「隔離」「検疫」を意味する英語“quarantine”は、イタリア語の40が語源で、かつて、港に着いた船の乗船者が、上陸するまで40日間隔離されたことに由来します。聖書における40日が、新しいフェーズを迎えるまでの神から与えられた準備期間であることと重ねあわせるなら、COVID-19下における期間(年単位になるかもしれません)が教会にとって強制された安息日となり、朽ちることのない福音の証しと、新たな成熟を迎えるための期間となることを期待して祈ります。——主の平安が私たちにありますように。

AI 技術の成熟と教会を考える～30年後を見据えて～

日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団/中央聖書神学校 能城一郎

1. はじめに技術の習得ありき

「今は、IT 技術を身につける時期。技術の暗黒面を模索する時ではない。」と提言したのは、第四回日本伝道会議 (JCE4@沖縄 2000) の分科会 (インターネットの光と影) の席上である。今では、JEA、福音主義神学会、第六回日本伝道会議 (JCE6@神戸 2016) 等の情報の電子化が精力的に行われ、教会が ICT 技術を巧みに利用してきている。COVID-19 の中、ZOOM ですぐに臨時神学委員会を開催することが出来た。これも、各人、関係団体の ICT 技術習得の積み重ねの結果である。

この騒動がなければ、今年 5G の導入でビックデータをはるかに凌ぐ AI 技術に依存する社会への扉が大きく開くはずであった。扉の先を垣間見るには数年かかるかもしれない。「30 年後を見据えて」の副題は、ICT 技術界では定説である二つの特異年による。(1)IT 技術の大転換、2032 年。(2)ネット情報の飽和期、2045 年。2032 年、聖書研究ソフトは、PC の OS に依存しないネットで動く、iCloud 化に移行する。2045 年、ネットの情報が飽和する時期である (※2049 年説もある)。人類が、経験したことのない AI との共存世界に突入するのである。

「永遠に立つ神のことば」を読みつつ、流動する ICT 技術習得に爽やかに適応することが、現代の教会に求められているのは確かなことであろう。

2. 聖書を読むことの新スタイル

2018 年の春と秋、台湾で若者の聖書研究のスタイルを調査する機会があった。皆、スマホで聖書を読み、お証の時もスマホ画面を見ながら話をする。週報は、スマホでダウンロードである。圧巻だったのは、神学生が利用する聖書アプリである。無論無料である。

(<https://bible.fhl.net/>)

画像左上の新版をクリックするとクリエイターを武者震いさせるサイトが待ち構えている。筆者は、第七回日本伝道会議 (JCE7@東海 2023) のプロジェクト・リーダーを兼任している。2023 年のフォーラムでは、このサイトを含めネット上の「聖書研究サイト」を調査し参加者と意見交換をしたいと願っている。過去の聖書研究サイトに関しては、『「聖書信仰」の成熟をめざして』(いのちのことば社、2017 年、113-120 頁) に紹介させて頂いたのでこれをお読みして頂ければ幸いである。



章節	和合本經文	新譯本經文	BBE 經文	新約福音經文	七十士譯本經文	註釋
1:1	起初、神創造天地。	起初、神創造天地。	At the first God made the heaven and the earth.	בְּרֵאשִׁית בָּרָא אֱלֹהִים אֶת הַשָּׁמַיִם וְאֶת הָאָרֶץ	Ἐν ἀρχῇ ἔσθιεν ἡ οὐρανὸς καὶ ἡ γῆ.	五經 五經 五經 五經 五經
1:2	地是空虚混沌、渊面一无所有、神的灵运行在水面上。	地是空虚混沌、渊面一无所有、神的灵运行在水面上。	And the earth was waste and without form, and it was dark on the face of the deep, and the Spirit of God was moving on the face of the waters.	וְהָאָרֶץ תֵּהוֹמָה וְחֹשֶׁךְ הָיָה עַל-פְּנֵי תְהוֹמוֹת הַיָּם וְרוּחַ אֱלֹהִים מְעַלְּפָה עַל-פְּנֵי הַמַּיִם	καὶ ἡ γῆ ἄσχητος καὶ ἄκαταστατος ἦν καὶ ἄβυσσος ἐστὶν ἐπὶ τῆς ὕλης τοῦ ὕδατος.	五經 五經 五經 五經 五經

3. You Version と AI 技術

この無料アプリを利用されている方はかなりおられることでしょう。口語訳、新共同訳聖書を無料で読み聖句検索もできる。さらに、アカウント登録をすると AI 技術を利用して世界中で今、どの聖句が読まれているか等の AI 技術ならではの情報の入手が可能である。2032 年までに、JEA 青年委員会、日本青年伝道会議 (NSD) の提唱する「神の国マインド」の若き AI 技術者の登場を祈るばかりである。

(<https://www.christianpress.jp/the-2nd-japan-youth-mission-conference/>)

4. 仮称・日本語聖書の訳語データベースの構築

新改訳 2017 だけが利用する訳語を二つ紹介する。新約では、「神の公僕」、旧約では、「交わりのいけにえ」である。「公僕」の訳語は、ロマ書 13 章 6 節にのみ登場する。かつては、「神のしもべ」、「神に仕える者」と訳された箇所である。「交わりのいけにえ」は、85 節あり、「和解のいけにえ」が、旧訳語である。『聖書協会 共同訳』では、「会食のいけにえ」と改訳されている。聖書翻訳のライフ・サイクルは 30 年といわれる。30 年後の聖書翻訳事業の備えとして、各翻訳聖書を構成する約 3 万節に含まれる「漢字文字列」を 10 分程度で抽出する AI プログラムの開発をしている。このことは、神学委員研修会ですでに報告済である。この構想は、今後、JCE7 のプロジェクト・フォーラム等で紹介する予定である。

5. 神学的特異年 2054 年 (大シスマ千年)

廣瀬薫師 (JEA 理事長) が、「一致・超教派・神の国」の講演の中で「大シスマ千年・2054 年」に向けての神のくはたらき>に対する期待を熱く語られた (『舟の右側 7 月号』、2018 年)。COVID-19 の中、神の恵みの業の停止は決してない事は明らかである。2032 年、2045 年、そして、2054 年と神くはたらき>が世界中でより鮮明になってゆくことを願うものである。

コロナ禍におけるみことばの励まし

イムヌエル総合伝道団/聖宣神学院 宮崎聖輝

コロナ禍の中、関東4都県では緊急事態宣言の解除が目前に迫りました。しかし今後の見通しは依然として厳しく、長期戦を覚悟しなければならない状況のようです。このような中、多くの教会が困難に直面しその対応に追われていることでしょう。私が遣わされている教会でも、この数ヶ月間、配信礼拝に切り替えて対応してまいりました。なにかと信徒方も牧師も孤立を覚えやすい時期かと思いますが、このようなときだからこそ、みことばに励まされ、捕らえてくださっている主を見上げて前進させて頂きたいと願っています。私にできることはここ最近、講壇で開いたみことばを分かち合うことではないかと思い、以下に記します。皆様の上に主からの励ましと御支えがあることを心から願っています。

1. 創世記28章16節「まことに主はこの場所におられる」

教会堂での礼拝が難しくなり配信に切り替えた時、開かせて頂いた箇所です。有名なヤコブの逃避行の場面となります。兄の追手に怯え身の危険を覚えつつ孤独な旅を続けていたヤコブに主が臨んでくださって、ともにいてくださる主のはげましが語られました。「思いがけない時、思いがけない所に主は共にいてくださる」これがヤコブが学んだ確信です。今、わたしたちは、教会堂に集えない状況かもしれませんが、主は、思いがけないとき、思いがけない場所にも臨在して下さり、ヤコブにそうであったように、「あなたを離れない」と励ましてくださる主です。それぞれの場所が神の家、ベテルとなることを覚え、それぞれの家庭礼拝をも祝して下さる主を見上げましょう。

2. 詩篇46篇10節「やめよ、知れ。わたしこそ神」

詩篇46篇ほど、信仰者が困難や試練に直面したときに励まされた箇所はないのかもしれませんが、今、私達は目に見えないウイルスに囲まれ、恐れをいだかざるをえません。まだ治療法もワクチンも確立しておりません。しかし本当に恐れるお方はただ一人主であることを覚えたいと思います。みことばを通して主が「わたしこそあなたのさけどころ、また力、苦しむ時そこにある強きたすけ」「やめよ、知れ。わたしこそ神」と呼びかけています。目に見えない敵に右往左往する私達かもしれませんが、決して揺り動かされることのない主を、心を留めて今週も歩みましょう。

3. ルカの福音書17章12～13節「彼らは遠く離れたところにたち、声を張り上げて」

ここにソーシャルディスタンスを強いられたグループが登場しています。彼らはサマリヤにも入れず、ガリラヤにも入れない境で生きる者たちでした。今、共に集う教会堂から離れて礼拝を捧げています。距離を強いられています。けれども今朝、主は、その遠く離れたところの叫びをしっかりと受けとめてくださいます。そして、時間はかかるかもしれませんが、主は必ずご自身の栄光を教会に現してください。ここに出てくる者たちのように、主の御声に反応して歩みましょう。そして栄光が表されたとき、教会堂に引き返してきて、毎週、主に感謝の礼拝をささげるお互いでありたいと願います。

4. ヨハネ4章19～24節「まことの礼拝者たちが御霊と真理によって父を礼拝する時が来ます」

当時、サマリヤ人とユダヤ人の間で「礼拝場所」についての神学論争がありました。サマリヤ人が主張する礼拝場所と、ユダヤ人が主張する礼拝場所とが食い違っていたのです。主は、場所が問題ではない、御霊と真理によって父を礼拝するか否かが問われていると語られました。コロナ禍の中、インターネット上の礼拝について議論があると聞きました。答えをすぐに出すことは難しいかもしれませんが、少なくとも主は、場所がどこであっても、御霊と真理によって捧げる礼拝を父が祝して下さると語ってくださいました。もちろん教会堂での礼拝を心から待ち望む私達ですが、自宅の礼拝であっても、そこで神の言葉が開かれ、内に住みたまう御霊によって導かれて礼拝をささげるなら主は喜んで受け取ってくださることを覚えましょう。初代教会は、迫害が続く中、神殿という場所を追われてもなお家の教会などを通して礼拝を死守し続けたことを思い起こします。

5. ヨハネ20章19節、26節「戸に鍵がかけられていた・・・するとイエスがやって来て」

19節と26節で同じ描写が繰り返されています。「戸に鍵がかけられていた・・・けれどもそこにも主が入ってこられた・・・平安があるように」。弟子たちは、ユダヤ人指導者を恐れ、週の初めの日、戸に鍵をかけていました。しかしそこに主が入ってこられ「平安があれ」と語られました。恐れを抱き鍵をかけてそれぞれの場所で主の日を守るその代わりに、主は入ってきて下さり、いつもと変わらない挨拶で「平安あれ」と励ましてくださいます。一方、孤立していたトマスは、最初、復活の主に出会うことができませんでしたが、次の週、弟子たちの交わりに加えられて主と出会いました。主は交わりの中にご自身を表されることをも覚えましょう。コロナ禍の中においても、進んで交わりの中に身を置くお互いでありたいと思います。